

オーナーblog 第4話 「いくせい流で大成した人の“親”」（2023.5.18.）

高校でTopレベルになったり、現役で国公立大学に進学したり、医者になったりした塾生の“親”は、塾の指導に対してどんな「姿勢」だったのか？

もう20年以上も前の記憶になるが…

私の個性的な指導に、よくも口を出さずに任せて頂いたと思う。

登校拒否になりそうな加西市の男子には、家まで自転車で行ってキャッチボールをした。不安があるときは、鍋をつついて話を聞いた。神戸大から大手の商社マンになった。中学で70位くらいから京大生になった男子には、一緒に日本海から瀬戸内海まで歩いた。キャビンアテンダントになった高校生は、中国に連れて行って大学生と交流させた。

医者という“常識人”を長年してから思えば、「他人さんの子供のために、よくそこまでしたものだ」と感心する一方、保護者もよく信頼？したものだと思う。

万が一、怪我でもしたらどうする、悪い影響を受けたりしたら・・・

私は労力を考えず、相手がどうすればステップアップするかを考え続け、方法が浮かんだら実践していた。結果として自信になって、自分の課題を見つけて変わっていった。

親は、子供を信じたのだろう、私にかけたのだろう。

信じることは勇気があるし、親も“迷い”の心と戦ったのだろう。

その前提として、こどもが親を信じていたことがあったと思う。